人間発達科学部紀要　第３巻第１号：75－91（２００８）

日本の近代化の中で演奏されてきた西洋声楽曲のレパートリーの傾向について

嶋田　　愛*・千田　恭子

Acceptance of Western Vocal Music in Japan

Megumi SHIMADA, Kyouko SENDA

キーワード：声楽，歌曲，レパートリー，近代化
keywords：vocal music, repertory

はじめに

明治以来，わが国の近代化はひとことで言えば欧米化であったといえよう。積極的に欧米の技術・文化を導入する一方で，宣教師によってキリスト教の再布教も始められた。明治７年には現存している最初の讃美歌集『教のうた』『讃美歌』（奥野昌綱・ルミース編，木版）が刊行されている（手代木1999）。この事実から，讃美歌は「西洋の歌」の移入の始まりであると思われる。しかし，最も組織的に西洋音楽が移入されたのは，東京藝術大学の母体，「音楽取調掛」が創設されてからであると考えられている（淺香1976）。

明治５年，政府はわが国にとって初めての近代的な教育制度である，「学制」をしいた。この「学制」において，小学校の教科のひとつとして「唱歌」が置かれたが，これは外国の教育制度の模倣であり，カリキュラムが整っていなかったため，「当分之を欠く」と但し書きがつけられ，実際には行われなかった。それから年月を経て明治12年に，文部省は唱歌教育実施にあたり，調査研究を行うための官署を設けた。この官署が「音楽取調掛」である。「音楽取調掛」は伊澤修二が中心となり，「1．東洋二洋ノ音楽ヲ折衷シテ新曲ヲ作ル事，2．将来国楽ヲ興スベキ人物ヲ養成スル事，3．諸学校ニ音楽ヲ実施スル事」（伊澤1884），の三つを目標とし，事業を行った。 この事業を執り行うにあたり，明治13年にはアメリカからメーソンを招き，唱歌教材の作成とその指導法，およびその基礎となる和声・音楽理論などの指導を仰いだ。そして明治10年代の後半，わが国における唱歌教育の普及はようやくその緒についたのである（伊澤1884）。

「音楽取調掛」は，音楽取調所の名称を経て再び音楽取調掛に戻り，明治20年には東京音楽学校へと変わっている。この東京音楽学校は，小中学校の教員養成と専門家育成を目的として創立されている。明治23年には，わが国最初のコンサートホールである奏楽堂を付設した新校舎が作られており，これを機に正規の教育を受けた音楽教師が誕生することとなる。そして卒業生により，明治25年には学友会，明治29年には同声会という二つのグループが創設され，演奏活動を行っている。奏楽堂の建設とこれらの演奏グループの創設により，わが国の音楽会の数は激増していった（東京藝術大学百年史（演奏会篇　第二巻）1990）。音楽取調掛の時代に行われた演奏会では，外国人教師は例外として，学生は唱歌を独唱曲として演奏している。しかし東京音楽学校となってからは，学生や教師，卒業生らによって西洋声楽曲が各種コンサートで演奏され始め，国民に徐々に浸透するようになった。唱歌に関しては，近藤（2007）や山住（1968）の研究があり，西洋音楽移入の歴史に関しては，秋山（1966）や大森（1986）が詳しい。また，わが国でのオペラの発展に関しては増井（2003）の研究があるが，西洋声楽曲のレパートリーの移り変わりに焦点を当てた研究は，まだ十分にされたとは言えない。現在，わが国のクラシックの演奏会における西洋声楽曲のレパートリーは幅広い。その中でも，ドイツリートやイタリア歌曲，イタリアオペラに馴染みが深いように感じるが，ここに至るまでにわが国の西洋声楽曲のレパートリーはどのように変化してきたのだろうか。本論では，明治以来のわが国の近代化と共に歩んで

*富山県立八尾高等学校・富山県立中央農業高等学校非常勤講師

きた西洋声楽曲のレパートリーの移り変わりについて明らかにする。方法としては主に，現在の東京藝術大学の前身，東京音楽学校で行われた各種コンサートの資料を用い，その中から独唱曲として演奏されている西洋声楽曲について調査する。また，時期としては日本人によって初めて西洋声楽曲が演奏された明治29年から東京藝術大学設立までの約55年間を，時代を追って扱うものとする。戦中はアメリカ音楽が禁止されていたことからも想像できるように，歴史的な出来事はレパートリーの変化にも大きく影響を与えていると考えられる。もちろん，歴史的な出来事の連続性を考えた場合，時代を区切って記述することは必ずしも適切とは言えないであろう。しかし，一定の傾向を整理して把握するという目的から，本論では，明治期，大正期，昭和期（戦前），昭和期（戦中・戦後）の四つの時代に分け，それぞれの時代におけるレパートリーの特徴や変化を，歴史的背景とも結びつけ探っていく。

なお，本論における東京音楽学校で行われた演奏会のプログラムから引用した演奏曲目は『…』，作曲家名は（…）で示しており，現在理解されている名称と考えられるものは［…］で示している。

1．明治期に行われた演奏会

1）明治期の歌曲

「東京藝術大学百年史　演奏会篇」の資料によると，明治29年４月18日に初めて西洋声楽曲が演奏されている。プログラムは次の通りである。

明治29年４月18日，同声会春季演奏会
『死と娘』（シューベルト作曲）
『五月の夜』（ブラームス作曲）

初めて演奏された西洋声楽曲はドイツリートであった。この時の演奏者は幸田延である。幸田は明治22年に，「音楽専修者」として初めて文部省より海外留学を命じられており，ボストン，ウィーンに留学している。この演奏会は，幸田が留学から帰国した記念の演奏会である（萩谷2003）。この演奏会において幸田は，ドイツリートの独唱だけではなく，ヴァイオリン・コンチェルト（メンデルスゾーン）の独奏や弦楽四重奏（ハイドン）の第一ヴァイオリンも担当しており，留学で学んできた技術を多方面で発揮した。幸田は声楽家というよりは，ピアニスト，ヴァイオリニスト，作曲家として現在理解されている。

明治30年９月26日に行われた同声会臨時演奏会では，当時の音楽学校の外国人教諭である，シドニーエッチモールス，シュテルンバハ夫人が演奏している。

明治30年９月26日，同声会臨時演奏会
『カム　インツー　ゼ　ガーデン　マンデ』（パルフェ作曲）
『シ　ル　サビス』（パルフェ作曲）
『ノン　エ　エバー』（マテイ作曲）
『アーレン　ゼーレン　タ－ク』（ラッセン作曲）
『オー　シェーネ　ツァイト』（ギョッツェ作曲）

この演奏会では，パルフェやラッセン，ギョッツェといった，現在ではあまり耳にすることのない作曲家の作品が記載されている。パルフェは恐らく，アイルランドの作曲家であり，歌手でもある，［Balfe バルフェ］と思われる。ラッセンやギョッツェという作曲家は，現在理解されている作曲家の呼び名とはかけ離れているせいか，特定できなかった。しかしプログラムに記載されている曲目を見る限り，ドイツの作曲家であろう。

明治40年に行われた演奏会のプログラムからは，現代でもよく演奏されている曲目が目立ってきている。

明治40年11月９日，試業演奏会
『カーロー，ミヲ，ベン』（パピーニ《ジョルダーニ》作曲）
明治41年３月28日，卒業式
『菩提樹』（シューベルト作曲）

明治40年に演奏された『カーロー，ミヲ，ベン』は，［Caro mio ben（愛しい人よ）］だと思われる。これらの曲目は，現在の中学や高校の音楽科の教科書にもよく載っている。この演奏会での『菩提樹』は，山田耕筰により歌われている。山田は現在作曲家として知られているが，東京音楽学校では声楽科を卒業している。

当時の演奏会では，東京音楽学校の外国人教師により作曲された作品がよく演奏されている。代表的

なものは次の通りである。

明治43年５月28日・29日，第二十二回定期演奏会
『フォア　リーフ　クローヴァス』（ロイテル作曲）

この作品は，当時の東京音楽学校の教師であったロイテルにより作曲されており，この演奏会を期に昭和期に入っても演奏され続けている。ロイテルはアメリカ合衆国のピアノ教師であり，明治42年から明治45年まで東京音楽学校で唱歌とピアノを教えている。

２）明治期のオペラアリア

明治期に初めて演奏されたオペラリアも，歌曲と同様に幸田延により演奏されている。

明治29年５月30日，学友会演奏会
『オペラ「ミトラーネ」中　アー，レンヂ，ミ』（ロッシ作曲）

最初に演奏されたオペラアリアはロッシの作品であった。オペラアリアはこの演奏会以後しばらく演奏されていない。

明治35年以後は，メンデルスゾーンのオラトリオのアリアが演奏され始める。

明治35年２月23日，学友会演奏会
『パウルス』（メンデルスゾーン作曲）
明治38年７月８日，卒業式
『エライジヤ』（メンデルスゾーン作曲）
明治42年６月13日，第二十回定期演奏会
『ローレライ』（メンデルスゾーン作曲）

『パウルス』は現在オラトリオとして理解されている，［聖パウル］であると思われる。明治期によく演奏されており，当時人気のあった作品の一つと考えられる。19世紀最高のオラトリオとも言われており，現在でもオラトリオとして演奏される機会はあるが，アリアだけを取り出して独唱曲として演奏されることはほとんどない。メンデルスゾーンのアリアでは，歌劇『ローレライ』も，合唱を交えてではあるが何度か演奏されている。しかし未完ということもあり，現在ではほとんど演奏されていない。

メンデルスゾーンのアリアが演奏され始めた明治33年前後から，独唱としてオペラアリアが演奏される機会が急に増えている。この時期は，日本の唱歌音楽にとって実りの多い時期でもあった。滝廉太郎の「花」，「箱根八里」，「荒城の月」など，現在よく知られている唱歌や曲がこの時期に生まれている。この時期は，憲法公布などの国内制度の整備が進み，日清戦争での勝利も伴って，日本が自信を得た時期である。音楽の受容という観点から見れば，明治維新以来導入されてきた洋楽に対し，それをただ受け入れるだけではなく，咀嚼し，まがりなりにも創作を開始した時期にあたっていたと考えられている（團1999）。

明治37年には，モーツァルトのオペラアリアが初めて演奏されている。

明治37年12月？日，学友会吊祭会
『カンソーネ（Canzona from the Figaro）』（モーツァルト作曲）

初めて演奏されたモーツァルトのオペラアリアは「フィガロの結婚」からの曲であった。プログラムを見た限りでは，「フィガロの結婚」の中の何のアリアが歌われたのか推察できないが，この頃からようやく現在でも馴染みのあるオペラアリアが歌われ始めたといえる。モーツァルトのオペラアリアは，この他にも明治期に次の作品が演奏されている。

明治44年４月22日，23日，学友会春季演奏会
『靈笛中のアリア』（モツアルト作曲）
『ドンファン中のツェルリーナのアリア』（モーツァルト作曲）

『ドンファン』は現在理解されている［ドン・ジョバンニ］のことだと考えられる。これらの作品も現在大変人気があり，演奏される機会の多い作品である。この演奏会からは，プログラムにオペラの登場人物の名前も記され，ある程度どのアリアが演奏されているのか想像がつくようになってきている。

２．明治期のまとめ

明治期に東京音楽学校で演奏された西洋声楽曲の特徴の一つとして，全体的にドイツ語の作品が多く

演奏されているということが挙げられる。これには大きく分けて二つの理由があると考えられる。一つは，東京音楽学校で教鞭をとった教師の多くはドイツ人，あるいはドイツ文化圏の出身者であったということ。もう一つは，明治中期に盛んであった，わが国のドイツ崇拝が挙げられる。増井（2003）は，「明治中期の日本が，新文化のすべてにドイツ範を仰いだことは有名な事実である。1889年に発布された憲法はドイツのワイマール憲法を真似たものだった。」と述べている。当時の我国には政治だけではなく，文化的な側面もドイツから吸収しようという姿勢が見られたに違いない。

明治期の演奏会で取り上げられている歌曲は，ほとんどがドイツリートであった。鈴木（1997）は「東京音樂學校は師範学校，中学校，高等女学校用に唱歌集を出版するのであるが，これらの多くはドイツリートなどの旋律に日本古来の歌詞を付けたものであった。1889年（明治22年）の『中等唱歌集』など，明治40年頃まではドイツの音楽に邦題を付け，日本語の無関係な歌詞を付けて演奏されていた。」と述べており，ドイツリートが当時いかに重要視されていたかが分かる。中でもシューベルト，フランツ，メンデルスゾーンのドイツリートが多く演奏されている。シューベルトのリートは最も多い。現在でも，数あるドイツリートの中でシューベルトの作品は大変よく演奏され，レパートリーに加える声楽家が多い。フランツやメンデルスゾーンのリートは，現在ではあまり演奏会で取り上げられることはないが，明治期には数多く演奏されていた。一般的にドイツリートの作曲家と言えば，シューベルトの他にブラームスやシューマン，ヴォルフ，シュトラウス，マーラーなどが思い浮かぶが，ブラームスやシューマンは何度か演奏会で取り上げられているだけであり，他の作曲家の作品は明治期には全く演奏されていない。一言にドイツリートと言っても，当時は演奏される作曲家の作品が限られていたようだ。イタリア歌曲としては，トスティやジョルダーノ，フランス歌曲としてはグノーの作品などが演奏されているが，演奏回数は大変少ない。

アリアの代表的なものとしては，メンデルスゾーン作曲のオラトリオ「聖パウル」，ワーグナー作曲の「タンホイザー」，ウェーバー作曲の「オベロン」，ブルッフ作曲の「オデッセイ」，モーツァルト作曲の「フィガロの結婚」，ロッシーニ作曲の「セビリアの理髪師」などが演奏されている。ウェーバー作曲のオペラは，現在「魔弾の射手」が最も有名であり，独唱曲としてアリアもよく演奏されているが，「オベロン」はあまり馴染みがないように思われる。現在と同様に有名な作曲家の作品であっても，明治期前半には，現在あまり演奏されることのない曲がレパートリーになっていたとも言える。イタリアオペラの作品は，明治37年学友会吊祭会以降に演奏されている。その頃になると，モーツァルト作曲の「魔笛」，「フィガロの結婚」，「ドン・ジョバンニ」や，ベートーヴェン作曲の「フィデリオ」など，現在わが国で上演され，独唱曲としても取り上げられることの多いものが演奏され始めている。フランスオペラの作品は，マイヤベーア作曲の「プロフェート」の中のアリアが，明治45年に初めて演奏されている。

また，明治期には独唱曲としてコンコーネの作品が演奏されている。コンコーネは1801年にイタリアに生まれ，50番や25番などの５巻の声楽教則本を創り出した作曲家である。 特に50番の教則本は，声楽を学ぶ人誰もが用いると言っても過言ではなく，大変有名な教則本である。当時の演奏会のプログラムには，『コンコニー十二，十四』などと記載してあり，おそらく「コンコーネ50番」の教則本の中の練習曲ではないかと推察される。現在では，「コンコーネ」といった練習曲を演奏会で演奏することはまず考えられない。この事実は，「コンコーネ」の教則本が現在と同じように，当時も確かに使われていたことの証明になる。「コンコーネ」の演奏の記録は，明治37年以降は見られない。

明治44年３月25日の卒業式まではプログラムに『獨唱』としか記載していなかったものが，明治44年４月の学友会春季演奏会からは，『低音獨唱』や『高音獨唱』といったように，声種が示されるようになっている。現在で言う，「バリトン」や「ソプラノ」などの区分と思われるが，この頃からようやくそういった声の種類を考えるようになってきたのであろう。プログラムも，これまでのオペラアリアはオペラの名称だけ書いてあり，どの登場人物のアリアかなどは，プログラムを見た限りでは全く分からなかった。しかしこの演奏会からは，『ドンファン［ドン・ジョバンニ］中のツェルリーナのアリア』といったように，登場人物の名前も記され，ある程度どのアリアか想像がつくようになってきている。

この事実から，日本人にとっての西洋声楽曲の捉え方が変化していることが読みとれる。

3．大正期に行われた演奏会

1）大正期の歌曲

大正期にさしかかると，イタリア古典歌曲が演奏される機会が増えている。

大正１年10月26日・27日，学友会秋季演奏会
『プル　ディチェスティ』（ロッテイ作曲）
大正２年７月５日，学友会第５回土曜演奏会
『ペルラ・グローリア・ダドラルビ』（ボノンチーニ作曲）
大正３年７月４日，学友会土曜演奏会（グルック二百年記念音楽会）
『オーデル　ミオ　ドルチェ　アルドール』（グルック作曲）

これらの作品はイタリア古典歌曲として有名であり，声楽を学ぶ人ならば誰もが知っている。ロッティの『プル　ディチェスティ』は，明治44年５月の学友会春季演奏会でも演奏されており，二度目の演奏となる。イタリア古典歌曲としては，この作品が大正期に最も多く演奏されている。

明治期と同様に，大正期に入ってもドイツリートが数多く演奏されている。新たに演奏会で取り上げられた作曲家の作品がいくつかある。

大正２年６月７日，第二十八回定期演奏会
『黄昏の夢』（シトラウス作曲）
『秘密』（ウォルフ作曲）
『彼こそは』（ウォルフ作曲）

（シトラウス）は［R.シュトラウス］，ウォルフは［ヴォルフ］だと考えられる。R.シュトラウス，ヴォルフのリートはこの演奏会で初めて取り上げられている。

明治期から最も多く演奏されているシューベルトのリートで，新たに演奏されている作品がいくつかある。代表的なものは次の通りである。

大正３年10月17日・18日，学友会恤兵演奏会
『魔王』（シューバート作曲）
大正14年10月７日・８日，学友会秋季演奏会
『音樂に寄す』（シューベルト作曲）

（シューバート）は［シューベルト］だと思われる。これらの曲はシューベルトの作品の中でも大変有名な曲であり，中学や高校の音楽科の教科書にも載せられている。明治期からシューベルトのリートは数多く演奏され，大正期に入ってもその傾向は変わらない。シューマンやブラームスのリートもレパートリーの幅を広めている。

大正２年７月５日，学友会第５回土曜演奏会
『ディ・ロートスブルーメ』（シューマン作曲）
『モントナハト』（シューマン作曲）
大正３年９月26日，学友会第十回土曜演奏会
『二人の兵士』（シューマン作曲）
大正10年12月３日・４日，学友会秋季演奏会
『永遠の愛　作品四十三の一』（ブラームス作曲）

これらの作品は大正期に何度も繰り返し演奏されており，現在でも演奏会で取り上げられることが多い作品である。中でも，ブラームス作曲の『永遠の愛』は数多く演奏されている。

大正期に演奏されているドイツリートにはリストの歌曲もある。

大正６年12月２日，第三十三回定期演奏会
『君は早月の微風の如く温和に』（リスト作曲）
大正12年６月30日・７月１日，学友会春季演奏会
『ローレライ』（リスト作曲）

リストの作品は，現在ではピアノ曲や交響詩はよく知られているが，歌曲はあまり馴染みがないように思われる。

大正期に入ると，現在演奏される機会の多いフランス歌曲が少しずつ演奏され始める。代表的なものは次の通りである。

大正２年９月27日，学友会第六回土曜演奏会
『アヴェ　マーリア』（グーノー作曲）
大正８年２月15日，学友会第二十五回土曜演奏会
『悲歌』（マッスネー作曲）

（グーノー）は，現在理解されている［グノー］，（マッスネー）は［マスネ］だと思われる。グノー作曲の「アヴェ　マリア」は，フランス歌曲としては大正期に最も多く演奏されている。マスネ作曲の『悲歌』は，250曲以上に及ぶマスネの歌曲の中でもよく知られている作品の一つであり，フランス近代歌曲のレパートリーに加えられている。

大正期に入るとチャイコフスキー作曲の歌曲が演奏されるようになる。

大正13年６月27日・28日，学友会春季演奏会
『憧れを知る人のみぞ』（チャイコフスキー作曲）
大正13年11月22日，演奏旅行
『なぜ』（チアイコフスキ作曲）

チャイコフスキー作曲の歌曲は，明治期，大正期前半には全く演奏されておらず，大正期後半にさしかかり初めて演奏されている。ロシア歌曲としても初めての演奏となる。

２）大正期のオペラアリア

大正期初期から中期にかけ，イタリアオペラの演奏が増えている。明治期に演奏されていたモーツァルトやロッシーニの作品に加え，ヴェルディやドニゼッティ，ベッリーニ，プッチーニのオペラアリアが演奏されるようになる。

大正期に演奏されたヴェルディのオペラアリアは次の通りである。

大正２年３月25日，第二十四回卒業式
『歌劇シーモン，ボツカネーグラ中のロマンツァ』（ヴェルディ作曲）
『歌劇リゴレット中のアーリア』（ヴェルディ作曲）
大正３年10月17日・18日，学友会恤兵演奏会
『歌劇「マクベス」中のバンクヲーの抒情調』（エ゛ールディ作曲）
大正６年２月24日，学友会第十九回土曜演奏会
『歌劇「椿姫」中のキ゛オレッタ抒情調』（ヴェルディ作曲）
大正13年11月７日，演奏旅行
『歌劇「アイーダ」中の抒情調』（ヴェルディ作）

中でも「椿姫」，「リゴレット」のオペラアリアはよく演奏されていた。昭和６年２月24日に演奏されている，『歌劇「椿姫」中のキ゛オレッタ抒情調』は，［歌劇「椿姫」のヴィオレッタのアリア］だと思われる。「椿姫」の中のヴィオレッタのアリアは，一般的にソプラノのアリアの中でも難曲の一つとして知られている。ドニゼッティやベッリーニ，プッチーニのオペラアリアでは次の作品が演奏されている。

大正７年９月28日，学友会第二十四回土曜演奏会
『歌劇「アンナ　ボレーナ」中のシーンとカヴ゛ァティナ』（ドニゼッツィ作曲）
大正８年３月25日，卒業式
『歌劇「ノルマ」中の抒情調』（ベッリーニ作曲）
大正10年12月３日・４日，学友会秋季演奏会
『歌劇「ルチア」中の抒情調』（ドニツェッツィ作曲）
大正13年３月25日，卒業式
『歌劇「ジョコンダ」中のロマンス』（ポンキエルリ作曲）
大正14年５月23日，学友会第四十一回土曜演奏会
『ワルツレント（歌劇ボエーム）』（プッチニ作曲）

これらは現在演奏される機会が多く，人気のある作品である。オペラとして上演される機会も多い。（ポンキエルリ）は現在理解されているイタリアの作曲家，［ポンキエッリ］，（ドニゼッツィ），（ドニツェッィ）は［ドニゼッティ］，（プッチニ）は［プッチーニ］であると思われる。ポンキエッリはプッチーニとマスカーニの師匠であり，「ジョコンダ」は，ヴェルディが絶対的な力で抑圧していた19世紀中頃のイタリアオペラ界で，それに比肩する成功を収めた唯一の作品であるとされている。イタリアオペラは明治期，モーツァルト，ロッシーニの作品が主流であったが，大正期に入ると新たに演奏される曲目も増え，レパートリーの幅を広めている。

ドイツオペラでは，ワーグナーの作品が数多く演奏されており，大正２年には，「ワーグナー百年祭紀念演奏会」が開かれている。また，ウェーバーの作品の演奏回数も多い。

大正２年５月22日，ワーグナー百年紀念演奏会

『歌劇「タンホイザー」中のアリア』（ワグナー作曲）
『歌劇「リエンツイ」中の抒情調』（ワグナー作曲）
『歌劇「ディ　ヴァルキューレ」中のヴォータンの別れ』（ワグナー作曲）
大正３年10月17日・18日，学友会恤兵演奏会
『歌劇「ローエングリン」中のローエングリンの名宣り』（ワ゛ーグナー作曲）
大正４年10月29日・30日，学友会秋季演奏会
『歌劇「自由射手」中のマックスの抒情調』（エ゛ーバー作曲）

（ワグナー）や（ワ゛―グナー）は［ワーグナー］，（エ゛―バー）は［ウェーバー］だと考えられる。ワーグナーのアリアでは，「タンホイザー」，「ローエングリン」の作品が明治期末から演奏されており，大正期に入ると更に演奏回数が増えている。これは，欧米に広がっていたワグネリズム（19世紀後半に盛んだったワーグナー信奉の傾向）の影響が大きいと思われる。ドイツでは明治16年にワーグナーが亡くなった後，妻のコジマが夫の遺志を継ぎ，バイロイトで明治29年に「ニーベルングの指輪」を復活して大変な反響を呼んでいたとされている。ドイツに留学した日本人はこぞってワーグナーを賛美した中で，音楽学校の最実力者の幸田延は明治28年の帰国以来ワーグナーの重要性を強調していた（増井2003）。そうした時代の流れのもと，東京帝国大学（現東京大学）には，ドイツ文学を講じていた石倉小三郎を中心に【ワグネル会】と名づけられた研究会が発足し，「タンホイザー」の翻訳に着手した。また，このワグネリズムは慶応義塾大学の学生たちをも刺激し，明治35年４月には慶応義塾大学ワグネル・ソサイエティーが発足している。そのオーケストラと男声合唱団は今日なお継続されている（木村1986）。東京音楽学校において，明治期から大正期にかけてワーグナーの作品が数多く演奏されている背景には，こうしたワグネリズムが深く影響しているといえる。

ウェーバーのオペラアリアは，明治期に演奏されていた「オベロン」，「フライシュッツ」に加え，大正期では『自由射手』が演奏され始める。『自由射手』とは現在理解されている［魔弾の射手］だと思われる。「魔弾の射手」は現在，ウェーバーのオペラの中で最も有名な作品である。しかし大正期に入ってもウェーバーのオペラは「フライシュッツ」の中のアリアほうがよく演奏されている。

大正期に入ると，フランスオペラのアリアが数多く演奏され始める。代表的なものは次の通りである。

大正２年２月８日，学友会第四回土曜演奏会
『歌劇「サムソンとダリラ」中の「春の叙情調」』（サン，サンス作曲）
大正２年５月31日，学友会春季演奏会
『ル，フィール，ドゥ，カディ』（ダリベー作曲）
大正３年３月25日，卒業式
『歌劇「フーゲノッテン」中の侍童のカヴァティネ』（マイヤベーア作曲）
大正３年９月26日，学友会第十回土曜演奏会
『歌劇「ミニョン」中の抒情調』（トーマ作曲）
大正３年10月17日・18日，学友会恤兵演奏会
『「カルメン」中のミカエラの宣叙調と抒情調』（ビゼー作曲）
『「ファウストの劫罰」中のメフィストのセレナーデ』（ベルリオース作曲）
大正６年10月27日・28日，学友会秋季演奏会
『「カルメン」中のハバネラ』（ビゼー作曲）
大正７年２月23日，学友会第二十二回土曜演奏会
『「フォースト」中のメフィストフェレスの小夜楽』（グノー作曲）
大正13年３月１日，学友会第三十回土曜演奏会
『「ロメオとジュリエット」中のワルツ』（グノー作曲）

（サン，サンス）は現在理解されている［サン＝サンース］，（ダリベー）は［ドリーブ］だと思われる。また，大正７年に演奏されている，グノー作曲の『フォースト』は［ファウスト］ではないかと考えられる。明治期にはほとんど演奏されていなかったフランスオペラだが，大正期には作曲家も幅広く，さまざまな作品が演奏されている。中でもマイヤベーアのオペラアリアは最も多く，「フーゲノッテン」の他にも，「預言者」，「ユグノー教徒」，「ディノラー」，「アフリカの女」と作品の幅も広い。マイヤベーアは現在，フランスオペラの作曲家としてはあまり馴染みがないが，大正期では人気があったようだ。サン＝サーンスの「サムソンとデリラ」，ビ

ゼーの「カルメン」，グノーの「ファウスト」はフランスオペラとしてよく知られている。

4．大正期のまとめ

大正期に入ると，第一次世界大戦勃発による不況から好景気への急速な進展，英米との関係強化なども原因して，大正デモクラシーと呼ぶ新しい空気の中で音楽活動が始まっている。大正期では日本の声楽界，オペラ界に大きな変容がいくつか見られる。代表的な出来事としては，明治期末に創立された帝国劇場に，大正元年８月５日，イタリア人ローシー夫妻により歌劇部及び声楽部が設けられたことである。帝国劇場は大正８年にはロシア歌劇団を，大正12年にはイタリアオペラのカーピー歌劇団を招聘している。大森（1986）は，「伝統を持った両国の本格的大歌劇の公演は，それぞれの時代を代表する洋楽関係者は勿論，知識人，好楽家，学生などに支持され，日本の歌劇の流れに影響を与えた。」と述べており，両歌劇団が日本のオペラ界に与えた影響を指摘している。また大正期には，東京の浅草を中心とする小劇場で多く上演された浅草オペラが根強い流行をもたらしている。浅草オペラは，大正12年９月１日に起きた関東大震災以後，大震災の被害や，ロシア，カーピー両歌劇団の来日によって目立ってきた本格的なオペラとの違いから，人々にあまり受け入れられなくなり衰退している。しかし日本のオペラ界や，音楽社会に与えた影響は大きいようだ。日本にオペラ，あるいはミュージカル的なものへの人々の関心を広め，多彩な音楽を大衆に受け入れやすい形で非常に広い層に浸透させている。浅草オペラは大衆の音楽的感覚の形成に，大きな役割を果たしていると考えられている（増井2003）。

そのような社会状況の中，東京音楽学校関係の演奏会回数も増え，演奏される西洋声楽曲のレパートリーは随分広まった。現在のレパートリーに徐々に近づいていると言える。東京音楽学校の生徒は音楽を専門に勉強しているため，大衆向けの浅草オペラから受けた影響は少ないかもしれないが，本格的外国歌劇団の招聘など，帝国劇場が彼らに与えた影響は大きいと思われる。また，明治期では作曲者や曲名がプログラムを見ただけでは特定しにくいものが多かったが，大正期では大変少なくなり，現在理解されているものに徐々に近づいてくるようだ。

大正期に演奏された歌曲に関しては，明治期と同様にドイツリートがよく演奏されている。特に大正期末，大正13年，14年頃は，演奏会で取り上げられている声楽曲のほとんどがドイツリートであった。その中でも，明治期に引き続きシューベルトの作品は最も多く，次いでブラームス，シューマンの作品がよく演奏されている。大正期に演奏されているシューベルトの作品は全体で31種類にも及び，実に幅広い。数多く演奏されているシューベルトの作品の中でも，「音楽に寄す」や「魔王」など，現在の中学や高校の音楽科の教科書に載っているような有名な作品の中で，大正期に初めて演奏されているものもある。ブラームスの歌曲も10種類以上に及ぶ。また，大正期からはウォルフやR.シュトラウス，グリーグ，リスト，コルネリウス，ルビンシュタインの歌曲も演奏され始め，ドイツリートのレパートリーの幅が広まっている。フランツ，メンデルスゾーンの歌曲も明治期に引き続き何度か演奏されている。イタリア歌曲はドイツリートに比べて演奏されている回数は大変少ないが，ロッティやボノンチーニといったイタリア古典歌曲として有名な作曲家の作品や，ドニゼッティの歌曲が演奏され始めている。中でも，ロッティの「Pur dicesti, o bocca bella（美しい唇よ，お前は言ったのだ）」は最も多く演奏されている。明治期に一度演奏され，現在でも大変有名な「Caro mio ben（いとしい人よ）」は大正期にはなぜか演奏されていない。フランス歌曲もイタリア歌曲と同様に演奏されている回数は大変少ないが，マスネやグノー，ビゼーなどの作品が何度か取り上げられている。中でも，現在でも有名なグノーの「アヴェ マリア」は最も多く演奏されている。また，大正期からはチャイコフスキーの作品も演奏され始めており，ロシア歌曲もレパートリーに加わっている。

オペラアリアに関しては，明治期はドイツオペラが中心だったが，大正期はフランスオペラが最も多かった。これは大正期のレパートリー大きな特徴と言える。明治期にはほとんど演奏されていなかったフランスオペラだが，大正期にはマイヤベーア，サン＝サーンス，グノー，トマ，マスネ，ビゼー，ドリーブ，ベルリオーズ，ゴダール，ラモーといった具合に，作曲家も幅広くさまざまな作品が演奏されていた。中でもマイヤベーアのオペラアリアは最も多く演奏されており，作品の幅も広い。他の作曲家

も現在のフランスオペラを代表するような作品が大正期に初めて演奏されている。大正期に入り，こうしたフランスオペラが数多く演奏されるようになった背景には，ワーグナーブームと共に訪れた，オペラブームが関係しているように考えられる。大正期に来日した，ロシア，カーピー両歌劇団は，「ファウスト」や「カルメン」，「ミニヨン」といった，フランス近代オペラを数多く上演している。これらは東京音楽学校関係の演奏会で演奏されているオペラアリアと相通じるものがある。大正期に入り，人々が本格的な外国歌劇団によるフランスオペラに触れる機会が増えたことも，このようなレパートリーの変化の一つの理由だろう。また，政治的な要因も考えられる。わが国の近代化はドイツを規範とすることから始まっており，特に明治期はドイツ崇拝の精神が強かったが，大正期に入るとこれが少し弱まる傾向になってきていると考えられる。しかし，東京音楽学校関係の演奏会のプログラムを見た限りでは，突然演奏される機会が増えたように思われるフランス音楽だが，もともと日本人に馴染みがなかったわけではない。東京音楽学校ではドイツ音楽中心に教育が推し進められていったのだが，明治４年に布告された兵制統一では，陸軍軍楽隊にフランス式軍楽が採用されている。明治期にはこの軍楽隊により，鹿鳴館や日比谷公園奏楽においてフランス音楽が数多く演奏されている。特に日比谷公園奏楽での演奏会は，フランスオペラの曲を中心にフランス音楽が多く取り上げられており，明治期のドイツ音楽中心にプログラムが組まれていた東京音楽学校の演奏会との違いは明白であったようだ（佐野2005）。陸軍軍楽隊がオペラアリアを披露したわけではないが，有名なオペラの旋律やオペラの序曲，間奏曲を演奏しているとみられる。フランス音楽受容の下地は，明治期の陸軍軍楽隊により作られていたといえる。大正期に演奏されているドイツオペラはウェーバー，モーツァルト，ワーグナーの作品が代表的である。中でもウェーバーの作品は最も多く演奏されており，明治期にも演奏されていた「Oberon」，「フライシュッツ」に加え，現在ウェーバーの作品として最も有名な「魔弾の射手」のアリアが演奏されている。モーツァルトの作品では「魔笛」の中のアリアが，ワーグナーの作品では「タンホイザー」の中のアリアが数多く演奏されている。イタリアオペラは，モーツァルト，ロッシーニ，グルック，ヴェルディ，レオンカヴァッロの作品が多く演奏されており，大正期後半になると，ベッリーニやドニゼッティ，プッチーニの作品も演奏され始めている。中でもモーツァルトの「フィガロの結婚」のアリアは明治期に引き続き最も多く演奏されている。大正期に入ると，ヴェルディの「椿姫」や「リゴレット」，ベッリーニの「ノルマ」やプッチーニの「ボエーム」といった，現在イタリアオペラとして大変人気のある作品のオペラアリアも演奏されるようになる。

５．昭和期（戦前）に行われた演奏会

１）昭和期（戦前）の歌曲

大正期末に引き続き，歌曲はドイツリートがよく演奏されている。繰り返し何度も演奏される作品が多く，確実にレパートリーとして定着しているドイツリートだが，昭和に入り新たに演奏される作品がいくつかある。

昭和２年３月25日，卒業式
『吾は好みての緑の森を通り行きたり』（マーレル作曲）
『誰が此小歌を考えしか』（マーレル作曲）
『春の聲』（ヨハン・シュトラウス作曲）
昭和４年３月25日，卒業式
『ヴェニスの揺り籠の歌』（マルクス作曲）
昭和４年12月21日，学友会第二十五回土曜演奏会
『心の交換』（レーガー作曲）
『森のさびしさ』（レーガー作曲）
『吾が愛する人』（レーガー作曲）

（マーレル）は現在理解されている［マーラー］だと考えられる。マーラーの歌曲は昭和期に入り初めて演奏されており，この後も何度か演奏され，レパートリーとして取り入れられるようになる。J.シュトラウス作曲の『春の聲』は大変有名である。マルクスやレーガーのドイツリートは，現在では馴染みが薄く，あまり演奏される機会がないように思われる。

明治期，大正期と同様に，ドイツリートではシューベルトの作品が最も多く演奏されている。シューベルトの作品は昭和に入ると更に歌われる作品の種類も増え，これまで歌い継がれてきた作品に加え新た

な曲目を目にすることができる。代表的な作品は次の通りである。

昭和６年10月31日，学友会第五十八回土曜演奏会
『粉屋と小川』（シューベルト作曲）
昭和７年10月15日，第六十一回学友演奏会
『鱒』（シューベルト作曲）

これらはシューベルトの歌曲の中でも大変有名である。昭和６年に初めて演奏された『粉屋と小川』は，メゾ・ソプラノの稲見静子により演奏されている。この曲は，歌曲集「美しき水車小屋の娘」の中の作品であり，現在では女性によって歌われることはほとんどない。現在との演奏形態の違いは大変興味深い。

イタリア歌曲やフランス歌曲でも，演奏される回数は少ないが，それぞれ発展が見られるようだ。イタリア歌曲では次のような作品が演奏されている。

昭和６年１月17日，演奏旅行
『ルビーの美しい唇』（レスピーギ作曲）
昭和８年10月28日，第七十回学友会演奏会
『既にガンヂス河の日輪は』（ア・スカルラッティ作曲）
『吾を苦しむるを止めよ』（ア・スカルラッティ作曲）
昭和８年11月９日〜15日，演奏旅行
『私の太陽よ』（カプア作曲）

昭和８年に演奏された，スカルラッティ作曲の『既にガンヂス河の日輪は』は「陽は既にガンジス河から」，『吾を苦しむるを止めよ』は「私を傷つけるのをやめるか」であると考えられる。レスピーギの作品はこの演奏会で初めて取り上げられている。レスピーギの作品は現在，イタリア近代歌曲として有名であるが，昭和期ではこの『ルビーの美しい唇』以外演奏されていない。

フランス歌曲ではフォーレの作品が演奏され始めている。

昭和６年12月20日，秋季演奏会
『夢ノ後ニ』（フォーレ作曲）
『罪深キ人ノ歌』（フォーレ作曲）
『永遠ニ』（フォーレ作曲）

フランス歌曲はこれまで，マスネやビゼー，グノーの作品が演奏されてきたが，フォーレの歌曲は昭和期に入り，初めて演奏会で取り上げられている。フォーレの歌曲は現在，フランス歌曲の中でも人気があり，演奏される機会が多いように思われる。特に「夢の後で」は，フォーレの歌曲の中でも有名な作品の一つである。

昭和期では，ショパンの歌曲が演奏されている。

昭和９年12月９日，第七十九回学友会演奏会
『乙女の願い』（ショパン作曲）

この作品はショパンの歌曲としては代表的な作品とされているが，現在ではほとんど演奏される機会がないように思われる。昭和期（戦前）でも，この演奏会で一度きりの演奏となっている。ショパンの作品は現在，ピアノ曲は大変馴染みがあるが，声楽曲はあまり知られていない。

２）昭和期（戦前）のオペラアリア

大正期に演奏されたオペラアリアはフランスオペラが中心であったが，昭和に入ると演奏回数は減り，ドイツオペラ，イタリアオペラと並ぶようになる。フランスオペラの演奏曲目にほとんど変化はないが，いくつか新たに演奏されている作品がある。

昭和４年10月26日・27日，学友会秋季演奏会
『「ナハトラーゲル」中のガブリエーレの抒情調』（クロイツェル作曲）
昭和11年10月25日，第九十二回学友会演奏会
『泣け，泣け私の眼よ！「ル，シッド」より』（マスネ作曲）

「クロイツェル」という作曲家の作品は現在ではあまり馴染みがないように思われるが，昭和に入ると何度か演奏されるようになる。

ドイツオペラで新たに演奏されている作品は次の通りである。

昭和６年７月３日，演奏旅行
『フルート夫人のアリア「ウィンザーの陽氣な夫人方」』（ニコライ作曲）

昭和７年10月15日，第六十一回学友会演奏会
『歌劇「ウンデイネ」中のウンデイネの歌』（ロルツイング作曲）
昭和７年11月13日，第六十三回学友会演奏会
『歌劇「娼婦慣らし」中のカタエリーネの詠唱』（ゲッツ作曲）
昭和８年３月22日，卒業式
『歌劇「密獵者」中のレツィタティーボ及アーリエ』（ロルツイング作曲）
昭和10年３月22日，卒業式
『歌劇「ワッフェンシュミード」中のマリーの詠唱』（ロルツイング作曲）

『ウンデイネ』は［ウンディーネ］，『ウィンザーの陽氣な夫人方』は［ウィンザーの陽気な女房達］であると思われる。これらのドイツオペラは，現在ではあまり演奏される機会がない珍しい作品ばかりである。中でもロルツィング作曲の「ウンディーネ」のオペラアリアは数多く演奏されている。「ウィンザーの陽気な女房達」はニコライの代表作とされている。

イタリアオペラでは，ドニゼッティやベッリーニの作品で新たに演奏されているものが多い。

昭和２年３月25日，卒業式
『歌劇「ルクレーツィア・ボルジア」中のルクレーツィアの史詩歌』（ドニゼッティ作曲）
昭和３年２月25日，学友会第四十八回土曜演奏会
『「ドン・セバスティアーノ」中のロマンス』（ドニゼッティ作曲）
昭和４年６月１日，学友会第五十一回土曜演奏会
『歌劇「ルチーア」中の小抒情調』（ドニツェッティ作曲）
昭和６年12月19日・20日，学友会秋季演奏会
『オヽ，私のフェルナンドよ「ラ，ファボリタ」の中より』（ドニゼッティ作曲）
昭和12年５月22日，選科洋楽春季演奏会
『歌劇「聯隊の娘」中のマリエのロマンツェ』（ドニゼッティ作曲）
昭和12年11月８日，銃後奉仕演奏会
『歌劇「愛の魔藥」中のネモリーノの詠唱』（ドニゼッティ作曲）
昭和12年12月11日，第103回学友会演奏会
『歌劇「ロメオとジュリエッタ」よりジュリエッタのロマンツェ』（ベリーニ作曲）
昭和12年12月12日，第104回学友会演奏会
『「清教徒」よりエルヴィラの詠唱』（ベリーニ作曲）

ドニゼッティのオペラアリアは，大正期には「アンナ・ボレーナ」や「ランメルモールのルチア」の中のアリアだけが演奏されていたが，昭和に入り作品の幅が随分広まっている。ベッリーニの作品も大正期末に演奏された「ノルマ」のアリアに加え，現在でも演奏会で取り上げられることの多い作品が演奏されている。イタリアオペラとして代表的なプッチーニの作品では次の作品が新たに歌われている。

昭和５年２月15日，第三回校内演奏会
『「トスカ」藝術と愛に生きて』（プッチイニ作曲）
昭和７年３月22日，卒業式
『歌劇「ボエーム」中のミミの抒情調』（プッチーニ作曲）
昭和10年10月14日～24日，演奏旅行
『晴れたる日に』（プッチーニ作曲）
昭和12年11月８日，銃後奉仕演奏会
『歌劇「トスカ」第三幕・カヴァラドッシの詠唱「星も光りぬ」』（プッチーニ作曲）

プッチーニのオペラアリアは，大正期末には，歌劇「ラ・ボエーム」中のオペラアリア，「私が町を歩く時（ムゼッタのワルツ）」が演奏されていた。昭和に入ると，現在馴染みがあり，演奏される機会の多いイタリアオペラのアリアとして代表的な作品が演奏され始める。昭和５年に演奏されている『「トスカ」藝術と愛に生きて』は，［歌劇「トスカ」の中の「歌に生き恋に生き」］，昭和10年に演奏されている『晴れたる日に』は，［歌劇「蝶々夫人」の中の「ある晴れた日に」］であると考えられる。増井（2003）は，「昭和期のオペラ界の大きな変化として，声楽家の海外留学が増え，海外での演奏活動，特にプッチーニ作曲の「蝶々夫人」を歌う声楽家が増えたことが挙げられる。」と述べている。「蝶々夫人」は明治時代の日本を舞台とした作品であり，当時の日本人の声楽家は海外での公演でもてはやされたことだろう。

6．昭和期（戦前）のまとめ

昭和期は，わが国の洋楽会が欧米の模倣から脱して独自の歩みを開始した時代であるとされている。東京音楽学校の定期演奏会は，昭和４年から会場を上野の奏楽堂から日比谷公会堂に移し，その内容もますます充実していったようだ（東京藝術大学百年史 1987)。昭和期（戦前）のオペラ界の変化として，大正期からの外国歌劇団の来日が遠のくといった変化があるようだが，藤原歌劇団のオペラ公演を代表とする，日本人によるオペラ活動が始まっている。また，レコード音楽というジャンルが生まれたことや，音楽雑誌，音楽書，楽譜出版が増加しており，クラシック音楽が人々にとってより身近な存在になってきたと考えられる。増井（2003）は，「昭和期の日本は大変な不景気で，洋楽活動もその影響を受けた訳だが，発展の方が落ち込みよりも勢いが強く，全般は大きく躍進を遂げた時代と位置づけられよう。」と述べている。

この時期の声楽演奏での大きな特徴としては，ドイツリートが大変多く演奏されているということが挙げられる。この傾向は，もともと東京音楽学校が設立された当初から起こっていたのだが，大正期に入るといったん薄れ，大正期末から再び増加している。大正期中頃までは歌曲よりもオペラアリア，特にフランスオペラが多く演奏されていた。しかし大正期末から昭和期（戦前）にかけては，演奏会のプログラムのほとんどをドイツリートが占めているとも言える。この傾向は我国の国政とも深く関わっているようだ。昭和11年11月25日，日本はヒットラー政権下のドイツと日独防共協定を結んでいる。この歴史的事象からも昭和期は，大正期に一旦薄れたゲルマン民族思考が再び興隆していることが考えられる。実際に日独防共協定を結んでからは，東京音楽学校も国政に準ずることが余儀なくされており，反ナチスであった当時の東京音楽学校の教師，プリングスハイムは辞めさせられている（淺香1993)。

昭和期に入り新たにレパートリーに取り入れられたドイツリートの作曲家としては，マーラー，レーガー，J．シュトラウス，マルクスが挙げられる。明治期，大正期と同様にシューベルトのリートは最も多く演奏され，次いでブラームス，シューマン，ヴォルフ，シュトラウス，ベートーヴェン，となっている。その他にもメンデルスゾーンやリスト，フランツ，グリークの作品が演奏されている。イタリア歌曲では，カプアやスカルラッティ，レスピーギの作品が新たにレパートリーに加わっている。フランス歌曲ではフォーレの作品が新たにレパートリーに取り入れられており，ロシア歌曲ではチャイコフスキーに加え，グレチャニノフの作品が新たに演奏されている。

オペラアリアでは，大正期に比べ演奏される回数は減っているが，逆に現在でも演奏会でよく取り上げられるような作品が厳選されてきたように思われる。大正期に演奏されたオペラアリアはフランスオペラが中心であったが，昭和に入ると演奏される回数は減り，ドイツオペラ，イタリアオペラと並ぶようになった。ドイツオペラでは大正期に引き続き，ワーグナー，ウェーバーの作品が数多く演奏されている。イタリアオペラではドニゼッティ，プッチーニ，ロッシーニ，モーツァルト，ヴェルディの作品が多い。イタリアオペラの演奏は，昭和中期に近づくにつれて増えており，ドニゼッティ，プッチーニ，ベッリーニの作品で新たに演奏されているものがいくつかある。フランスオペラは大正期のレパートリーとほとんど変わらない。しかし新たに興味深い事実が分かった。

昭和８年３月22日の卒業式においてソプラノの中村淑子が歌った，『歌劇「カルメン」中のミカエラのアーリエ』に対しての講評である。「學生としては相當な出來であるが何故只一つのラテン音樂であるカルメンを獨逸語で歌つたのか了解に苦しむ處である」（東京藝術大学百年史 1987)。この講評から，本来ならばフランス語で歌われるはずの「カルメン」のミカエラのアリアが，ドイツ語で歌われているということが分かる。昭和期に入っても，フランス語のオペラアリアはドイツ語で歌われる機会があったようだ。明治期，大正期はなおさらのことだと考えられる。

7．昭和期の演奏会（戦中・戦後）

1）昭和期（戦中・戦後）の歌曲

昭和期（戦中・戦後）に演奏されている歌曲は，相変わらずドイツリートが多い傾向にある。しかしドイツリートの演奏されている曲目はほとんど変わっていない。歌曲のレパートリーの変化としては，昭和期（戦前）に比べ，イタリア歌曲やフランス歌曲

で新たに演奏されている作品が増えたことが挙げられる。イタリア歌曲では，イタリア古典歌曲として知られるものが数多く演奏され始めた。代表的なものは次の通りである。

昭和14年５月20日，学友会116回洋楽演奏会
『すみれ』（スカルラッティ作曲）
昭和14年６月10日，春季選科洋楽演奏会
『セント　ネル　コーレ』（スカルラッティ作曲）
昭和15年２月10日，学友会代122回洋楽演奏会
『愛の歓び』（マレティーニ作曲）
昭和15年12月７日，秋季選科洋楽演奏会
『若し「フロリンド」忠實ならば』（スカルラッティ作曲）
昭和16年６月14日，春季選科洋楽演奏会
『踊れよ踊れよ優しき少女』（ドゥランテ作曲）
昭和17年11月21日，春季選科洋楽演奏会
『アマリリは美し』（カッチニィ作曲）

これらの曲はどれも，「イアリア古典歌曲」として有名であり，声楽を勉強する人誰もが最初に勉強するような曲ばかりである。中でもスカルラッティの「すみれ」，「セント　ネル　コーレ」は数多く演奏されていた。

イタリア近代歌曲の中でも新たに演奏されている作品がある。

昭和13年６月19日，第109回学友会演奏会
『くちづけ』（アルディッティ作曲）
昭和14年１月16日，学友会第120回洋楽演奏会
『小夜曲』（マスカーニ作曲）
昭和16年２月16日，学友会第130回洋楽演奏会
『アヴエマリア』（ルツツィ作曲）

これらも現在演奏される機会が多い作品である。

フランス歌曲ではドビュッシーの歌曲が新たに歌われている。演奏曲目は次の通りである。

昭和16年３月25日，卒業演奏会
『綠』（ドビュッシー作曲）
昭和23年10月28日，音楽教育創始七十周年記念演奏会
『「華やかなる餐宴」より　1．ひそやかに　2．操り人形　3．月の光　4．無邪気　5．牧羊神　6．悲しき對話』（ドビュッシイ作曲）
『「ヴィヨン」の詩による三つのバラッドより　1．ヴィヨンから恋人への譚詩　2．ヴィヨンが母の願いにより書ける聖母への祈りの歌　3．パリ女の譚詩』（ドビュッシイ作曲）

昭和23年10月28日の音楽教育創始七十周年記念演奏会は，淺野千鶴子と安川加壽子のジョイントリサイタルであった（東京藝術大学百年史 1987）。淺野千鶴子の伴奏は全て安川が行っている。安川は，パリ音楽院を卒業しており，戦後ドビュッシーの楽譜の輸入版が高価すぎることや，フランス直伝の教えを受けられない人のために，ドビュッシーのピアノ独奏作品全集を分冊の形で音楽之友社から出版している。近代フランス音楽の第一人者として活躍した人物である。

フランス歌曲では，デュパルク，ショーソン，アーンの作品も新たに演奏されている。

昭和21年11月７日～12日，第一回芸術祭
『悲しき歌』（デュパルク作曲）
『牢獄にて』『我に若し翼あらば』『五月』（アーン作曲）
昭和26年３月27日～29日，卒業演奏会
『旅への誘い』『フイデイレ』（デュパルク作曲）
昭和27年３月27日～29日，卒業演奏会
『リラの花咲く頃』（ショーソン作曲）

この中でもデュパルク作曲の「旅への誘い」は何度も演奏されており，人気があったようだ。フランス歌曲は，戦前から歌われていたフォーレの歌曲の中でも新たに歌われる曲目が増え，更にレパートリーの幅を広めている。

２）昭和期（戦中・戦後）のオペラアリア

この時期に演奏されたオペラアリアは，フランスオペラでは少し変化が見られたが，ドイツオペラのレパートリーはほとんど変わっていない。しかしイタリアオペラは戦前に比べ随分演奏される機会が増えており，演奏曲目の幅が広まっている。ベッリーニやドニゼッティの作品で新たに演奏されているものは次の通りである。

昭和13年２月13日，第106回学友会演奏会

『歌劇「夢遊病者」より　アミナの宣叙唱及詠唱』（ベリーニ作曲）
昭和17年５月２日，研究科聴講生修了演奏会
『歌劇「ラムアームーアのルチア」中　ヘンリー・アシュトンの詠唱「憎悪と復讐の苦しみ我が心に」』（ドニゼッティ作曲）

プッチーニのオペラアリアでも，新たに演奏されている作品がある。

昭和16年５月３日，研究科終了演奏会
『歌劇「マノン・レスコー」中「ただひとり淋し」』（プッチーニ作曲）
昭和24年４月２日，研究科終了演奏会
『歌劇「ラ・ボエーム」より　冷たき手』（プッチーニ作曲）

現在でも人気のあるプッチーニの作品だが，戦前に比べ，更に演奏される機会が増えたようだ。プッチーニ作曲のオペラ，「ラ・ボエーム」の中のオペラアリアは，ソプラノの「私の名はミミ」や「ムゼッタのワルツ」は演奏されていたが，テノールの作品は初めてである。「マノン・レスコー」も初めて取り上げられている。どちらの曲も現在大変人気がある。

ヴェルディのオペラアリアでは次の作品が新たに演奏されている。

昭和15年11月20日，紀元二千六百奉祝演奏会
『歌劇「ファルスタフ」中　ナンネツタの詠唱』（ヴェルディ作曲）
昭和16年11月29日，秋季選科洋楽演奏会
『歌劇「リゴレット」より「女心の歌」』（ヴェルディ作曲）
昭和17年９月24日，卒業式
『歌劇「ナブッコ」中　アビガイレの詠唱』（ヴェルディ作曲）
昭和24年２月25日・26日，卒業式
『歌劇「オテロ」より　柳の詠唱』（ヴェルディ作曲）
昭和25年10月８日，演奏旅行
『歌劇「オテロ」より　アヴェマリア』（ヴェルディ作曲）

『ファルスタフ』は［ファルスタッフ］であると考えられる。昭和期（戦中・戦後）では，ヴェルディ作曲のオペラアリアのレパートリーが大変広まっている。戦前から演奏されている「椿姫」は相変わらず人気があるようだ。「ナブッコ」や「ファルスタッフ」のオペラアリアは一度ずつしか演奏されていないが，「オテロ」の「柳の歌」，「アヴェ　マリア」は昭和24年以降繰り返し演奏されている。

この時期イタリアオペラで新たに演奏され始めた作曲家の作品で，代表的なものはマスカーニのオペラアリアである。

昭和14年３月22日・23日，卒業式
『歌劇「カヴァレリア・ルスティカナ」中サントゥッツァーの詠唱』（マスカーニ作曲）

この作品はこの演奏会で初めて演奏されており，後にも何度か取り上げられている。現在では［ママも知る通り］という曲名で知られており，昭和期（戦中・戦後）において行われているその他の演奏会によっては，その題目でプログラムに記載されているものもある。マスカーニのオペラアリアとしては，現在この作品が最も有名だが，この他にもいくつか演奏されている。

昭和15年３月25日・26日，卒業式
『歌劇「イリス」中の詠唱』（マスカーニ作曲）
昭和16年２月16日，学友会第130回洋楽演奏会
『歌劇「友人フリッツ」より　わづかな花』（マスカーニ作曲）

歌劇「友人フリッツ」の中の「わづかな花」は，「ママも知る通り」と同様に現在でも演奏される機会の多い作品である。『歌劇「イリス」』の中のオペラアリアは，現在ではあまり馴染みのない作品のように思われる。

フランスオペラでは，戦前にも演奏されていたビゼーやグノー，マスネの作品で新たにレパートリーに取り入れられているものがある。

昭和14年５月20日，学友会第116回洋楽演奏会
『歌劇「眞珠採り」より　夢の如く聴く』（ビゼー作曲）
昭和14年６月17日，学友会第117回洋楽演奏会

『歌劇「ファウスト」より　バレンチノの詠唱
さらば心の故郷よ』（グノー作曲）
昭和15年３月25日・26日，卒業式
『歌劇「マノン」中　騎士デー・グリューの夢』
（マスネ作曲）

ビゼーの作品はこれまで，「カルメン」の中のオペラアリアは数多く演奏されていたが，「真珠採り」の中の作品は初めての演奏となる。グノーの「ファウスト」の中のアリアも，「宝石の歌」に加えて，「さらば心の故郷よ」が演奏され始めている。これらの作品はどちらもこの時期繰り返し演奏されている。マスネの「マノン」はこれ以後演奏されていない。また，フランスオペラでも新たな作曲家の作品がいくつか演奏されている。

昭和16年３月26日，卒業式
『歌劇「ルイーズ」中　ルイーズの詠唱』（シャルパンティエ作曲）
昭和24年４月２日，研究科終了演奏会
『「歸れる兒」より　母リアの詠唱』（ドビュッシー作曲）

シャルパンティエ作曲の「ルイーズ」は現在でも大変有名であり，演奏される機会の多い作品である。ドビュッシーの「歸れる兒」はカンタータ「放蕩息子」のアリアとして知られており，「放蕩息子」はドビュッシーがパリ音楽院在学中にローマ大賞を受賞した作品である。

８．昭和期（戦中・戦後）のまとめ

昭和16年12月８日の太平洋戦争勃発により，徐々に彩られてきた戦争色は音楽活動にも影響を及ぼすこととなった。音楽活動は報国団という団体に属して行われ，軍の監視下に置かれることとなった（東京藝術大学百年史 1987）。この時代の東京音楽学校の演奏会は，定期演奏会を除き，もっぱら報国団の恤兵演奏会が主となっている。戦中は，日・独・伊同盟によって，英・米の音楽は追放されている。しかしもともと日本人が演奏してきた西洋声楽曲の中で，英・米の作品はほとんどなかったため，戦争がレパートリーの変化そのものに与えた影響は少ないように思われる。

昭和期（戦中・戦後）に演奏された歌曲ではドイツリートのレパートリーはほとんど変わっていない。戦前と同様に，シューベルト，ブラームス，シューマン，R. シュトラウスの作品が多く演奏されている。変化があると言えば，戦前に比べ連作歌曲が演奏される機会が増えたことである。シューベルトの「美しき水車小屋の娘」や「冬の旅」，シューマンの「詩人の恋」や「女の愛と生涯」などがその例である。曲集の中からいくつかまとめてプログラムを組んであることが多く，戦前の演奏会に比べ，プログラムにまとまりが出てきたように思われる。しかし全体的にドイツリートの演奏は減っており，その反面イタリア歌曲が数多く演奏会で取り上げられるようになってきた。特にスカルラッティやカッチーニ，マルティーニといった，イタリア古典歌曲として有名な作曲家の作品が多く演奏され始めている。また，イタリア近代歌曲でもマスカーニやルッツィ，アルディッティといった現在でも耳にすることの多い作曲家の作品が演奏され始め，レパートリーの幅を広めている。これまでほとんど演奏されていなかったトスティの歌曲も，この時期からよく演奏されるようになる。フランス歌曲では，デュパルクやショーソン，ドビュッシー，アーンの作品が新たに演奏され始めている。しかしこれまでドイツリートが主流だったため，当時のフランス歌曲の演奏は大変珍しく感じられていたようだ。昭和26年に行われた卒業演奏会で，デユパルクの歌曲を演奏したソプラノの向田壽子への講評としては，「まだ多分にドイツくさいのとテンポが悪いのでフランスの味が弱い」（東京藝術大学百年史 1987）といったといった記事もある。フランス歌曲で最も多く演奏されているのは，フォーレの作品である。この傾向は現在にも通じるものがあるように思われる。

オペラアリアでは，ドイツオペラのレパートリーにほとんど変化はないが，イタリアオペラ，フランスオペラで新たに演奏され始めた作品がいくつもある。特に戦前に比べイタリアオペラは数多く演奏されており，プッチーニ，ヴェルディ，ドニゼッティ，モーツァルトの作品が多い。中でもプッチーニの「ラ・ボエーム」の「私の名はミミ」，「トスカ」の「歌に生き恋に生き」はよく演奏会で取り上げられていたようだ。戦前人気があった「蝶々夫人」はこの時期ほとんど演奏されなくなっている。これには太平洋戦争が影響しているようである。プッチーニ

作曲の「蝶々夫人」は，明治時代の日本を舞台とした，アメリカ合衆国海軍中尉と武士の娘との恋愛を描いた作品であり，アメリカと敵対していた日本にとっては内容的に不許可とされていたように思われる。戦時中はアメリカでも「蝶々夫人」は演奏禁止とされていたようだ（増井2003)。フランスオペラでは，昭和期（戦前）と同様に，大正期によく演奏されていたマイヤベーアの作品は少なく，ビゼーの「カルメン」やグノーの「ファウスト」，サン＝サーンスの「サムソンとデリラ」のオペラアリアがよく演奏されている。新たにシャルパンティエやドビュッシーのアリアも演奏され始め，現在人気のあるフランスオペラの作品は，この時期までにほとんど演奏会で取り上げられているようだ。ドイツオペラに関しても同じことが言える。イタリアオペラでも，現在人気のある作品はこの時期までにほとんど演奏されている。この後，東京音楽学校が東京芸術大学へと改組されるにつれ，さらなる発展が見込まれる。

昭和期（戦中・戦後）は，歌曲，オペラアリアといった偏りがなく，戦前に比べ幅広くさまざまな作品が演奏されており，徐々にイタリア音楽志向が強まってきている。これは，現在演奏される機会の多い西洋声楽曲の傾向と通じるものがある。長い戦争が幕を閉じ，人々が自由に音楽を学べるようになってきたこと，抑圧されていた活動が自由になったことがこの事実を反映していると言える。

おわりに

本論では，明治以来の近代化によって導入された西洋音楽の中で，声楽曲がどのように修得されていったかの経緯を明らかにするために，声楽曲のレパートリーに注目して，それがどのように移り変わってきたのかということを調査した。方法としては，現在の東京藝術大学の前身である東京音楽学校で行われた各種コンサートでの資料を用い，その中で演奏されている西洋声楽曲を，明治期，大正期，昭和期（戦前)，昭和期（戦中・戦後）の四つの時代に分け，それぞれの時期に演奏された曲目を詳細に調べた。その結果，各時代のレパートリーの傾向が次のように明らかになった。

明治期はドイツ音楽（ドイツリート）が中心に演奏されている。中でもシューベルト，フランツ，メンデルスゾーンのリートが多い。イタリア歌曲，フランス歌曲はこの頃ほとんど演奏されていない。アリアは，明治期末から演奏され始める。中でもメンデルスゾーンのオラトリオ「聖パウロ」のアリアが代表的である。

大正期はオペラブームと共にオペラアリアが多く演奏され始める。特にマイヤベーアの「預言者」やグノーの「ファウスト」など，フランスオペラのアリアが数多く演奏されている。大正期後半になると，ベッリーニやドニゼッティ，プッチーニの作品が演奏され始め，大正期末（大正14年，15年）辺りは再びドイツリートが中心となっている。明治期と同様にシューベルトのリートが最も多く，ヴォルフやR. シュトラウスのリートも演奏されるようになる。

昭和期（戦前）は大正期末に引き続き全体的にドイツリートが中心となる。中でも明治期，大正期と同様にシューベルトのリートが最も多く演奏されており，マーラーやレーガーのリートも新たにレパートリーに取り入れられるようになる。オペラアリアは大正期に比べ演奏される回数は減っているが，逆に現在演奏される機会の多い作品が厳選され始め，特にドニゼッティやプッチーニの作品が多く演奏されている。大正期はフランスオペラのアリアが中心であったが，昭和に入ると演奏される回数は減り，イタリアオペラやドイツオペラと肩を並べるようになる。

昭和期（戦中・戦後）は歌曲，オペラアリアへの偏りがなく，幅広くさまざまな作品が演奏されている。歌曲ではスカルラッティやカッチーニのイタリア古典歌曲，マスカーニなどのイタリア近代歌曲が演奏される機会が増える。フランス歌曲では戦前に演奏され始めたフォーレの作品に加え，ドビュッシーやアーンの作品も演奏され始める。オペラアリアではドイツオペラ，フランスオペラのレパートリーにほとんど変化はないが，戦前に比べイタリアオペラが中心となり，レパートリーの幅が広まっている。

以上のように，西洋声楽曲が導入されて以来，今日に至る日本の西洋声楽曲レパートリーの変化を，明確に示すことができた。さらに大きくまとめてみると，東京音楽学校において日本人により最初に西洋声楽曲が演奏された明治29年から，最後に演奏された昭和27年という期間の中で，現在馴染みの薄い作品は時代を追うごとに影を潜めていき，現在演奏される機会の多い作品は繰り返し演奏されている。そして，戦後になると幅広くさまざまな作品が

演奏されるようになり，主にドイツリートやイタリア歌曲，イタリアオペラが主流を占めるといった，現在の傾向に近づいているようだ。この約55年間の間に，さまざまな過程を経て，現在我国で演奏されている西洋声楽曲レパートリーの土台が出来上がったことが分かった。

明治期のわが国におけるドイツ国崇拝の精神，大正期の第一次世界大戦勃発による不況から好景気への急速な進展，そしてその中での本格的な外国歌劇団の来日，昭和期に入ってからの日本人によるオペラ活動の開始やレコード音楽の誕生，日独防協定によるドイツ国崇拝の精神の再来，戦中の日・独・伊同盟による英・米音楽の禁止など，さまざまな歴史的背景に伴い，わが国の西洋声楽曲のレパートリーは移り変わってきた。現在，幅広くさまざまな作品が演奏されている西洋声楽曲であるが，日本の近代化の中でいろいろな傾向を変えながら，今日の形に至ったのだということが，本研究を通じて明らかになった。

参考文献

秋山龍英　1965,『日本の洋楽百年史』，第一法規出版

浅香淳　1976,『音楽教育への軌跡』，音楽之友社

團伊玖磨　1999,『私の日本音楽史』，日本放送出版協会

萩谷由喜子　2003,『幸田姉妹　〜洋楽黎明期を支えた幸田延と安藤幸〜』，株式会社ショパン

伊藤制子　2003,『洋楽受容におけるフランス音楽をめぐる思考とその形成〜日本におけるフランス音楽受容を考えるための一試論〜』，東邦音楽大学研究紀要

伊澤修二　1884,『音楽取調成績申報書』,

近藤光江　2007,『日本における音楽教育の歴史とその変遷―「唱歌・童謡」の歌詞・旋律・リズムから探る』，川村学園女子大学研究紀要

増井敬二　2003,『日本オペラ史〜1952』，昭和音楽大学オペラ研究所編　水曜社

松永伍一　1990,『蝶は還らず　〜プリマドンナ喜波貞子を追って〜』，毎日新聞社

大森盛太郎　1986,『日本の洋楽・１〜ペリー来航から130年の歴史ドキュメント〜』，新門出版社

佐野仁美　2005,『明治期の日本におけるフランス音楽受容』，神戸大学表現文化研究会

鈴木由利子　1997,『西洋音楽の導入期におけるドイツ音楽にかかわる一考察』，パイデイア：滋賀大学教育実践センター紀要

手代木俊一　1990,『讃美歌・聖歌と日本の近代』，音楽之友社

東京芸術大学百年史刊行委員会　1987,『東京芸術大学百年史　東京音楽学校編　第１巻』,音楽之友社

東京芸術大学百年史刊行委員会　1990,『東京芸術大学百年史　演奏会篇 第1巻』，音楽之友社

東京芸術大学百年史刊行委員会　2005,『東京芸術大学百年史　東京音楽学校編　第２巻』,音楽之友社

山住正巳ａ　1968,『唱歌教育成立過程の研究』，教育学研究.

山住正己ｂ　1971,『洋楽事始』，平凡社

財団法人日本オペラ振興会　1986,『日本のオペラ史』，岩波ブックセンター信山社

付記

本論文は，富山大学教育学研究科に提出した2007年度修士論文の一部を千田の責任において加筆・改稿したものです。

（2008年５月20日受付）
（2008年７月２日受理）